

平成29年度オホーツク総合振興局管内ケガニ漁場一斉調査結果

平成29年5月8日

(地独) 北海道立総合研究機構水産研究本部
網走水産試験場

この調査は、漁期前半のケガニかご漁業の状況をモニタリングする目的で行われています。昭和60年から毎年1回、下記機関と共同で継続実施しています。

網走支庁管内毛がに漁業対策協議会および各漁協けがにかご部会
北海道オホーツク総合振興局産業振興部水産課

宗谷総合振興局管内についても同様の調査を実施しており、その調査結果は稚内水試が取りまとめています(稚内水試のホームページをご参照ください)。

なお、次年度の資源量や漁獲許容量については、漁期後半の「資源密度調査」から推定されます。

調査結果の要約

- ・ 甲長8cm以上雄の100かご当たり漁獲個体数は210個体で昨年(163個体)の1.3倍であり、過去のオホーツク総合振興局管内の平均値(310個体)の0.7倍でした。
- ・ 甲長8cm未満雄の100かご当たり漁獲個体数は41個体で昨年(25個体)の1.6倍であり、過去の平均値(137個体)の0.3倍と非常に減少しています。今後の加入状況には十分注意が必要です。
- ・ 甲長8cm以上雄に占める堅ガニの割合は管内平均では92%で、昨年(69%)より23ポイント増加しました。この割合は1986年(昭和61年)以降の最高値でした。
- ・ 全ての雄のうち甲長8cm未満の雄が占める割合は16%で、昨年(14%)より2ポイント増加しました。

調査方法

平成29年度の調査は雄武、紋別、湧別、網走、ウトロの各漁協に所属するけがにかご漁業許可船8隻が参加し、4月11日から25日までに実施しました。

各船は通常の漁場で操業し、漁獲されたケガニを選別せずにコンテナ1杯(約40kg)になるまで採集しました。このときコンテナが1杯になるまでのカニかごの数を記録してもらいました。また、採集した標本を無選別のまま全て(雌や8cm以下の雄を含めて)港に水揚げし、甲長や体重などを測定しました。

調査結果

表1に各船の調査日、調査点の緯度経度、水深、C P U E (1隻100かご当たりの漁獲尾数)を示しました。

表 1 2017(平成29)年 オホーツク総合振興局管内ケガニ一斉調査標本採集データ一覧

海域	漁協	調査日	船名	北緯	東経	水深 (m)	C P U E (100かご当たり漁獲個体数)				
							甲長8cm以上オス			8cm未満	メス
							堅	若	計	オス	
網走西部	雄武	4月11日	第十八新海丸	44 - 42.6	143 - 0.6	64	258	46	304	23	8
	"	"	第三十八錦栄丸	44 - 40.8	143 - 7.4	83	323	9	332	36	0
	紋別	4月25日	第十八平栄丸	44 - 27.3	143 - 33.5	88	365	24	388	100	0
	"	"	第八北幸丸	44 - 29.2	143 - 26.1	76	116	27	143	10	0
海域1隻平均							265	27	292	42	2
網走中部	湧別	4月21日	第8福王丸	44 - 20.9	143 - 38.4	62	81	5	86	10	0
	"	"	第八幸春丸	44 - 20.4	143 - 38.1	60	143	13	155	10	0
	海域1隻平均							112	9	120	10
網走東部	網走	4月14日	第八能代丸	44 - 1.2	144 - 32.2	65	214	0	214	107	14
	ウトロ	4月18日	第二十三北翔丸	44 - 0.3	144 - 49.4	58	56	4	59	31	25
	海域1隻平均							135	2	137	69
管内1隻平均							194	16	210	41	6

・CPUE（100かご当たり漁獲尾数）

図1に漁獲対象である甲長8cm以上雄ガニのCPUEとそれに占める堅ガニの割合の年変化を、図2には8cm未満の雄ガニ（規格外）のCPUEを海域別とオホーツク総合振興局管内全体で示しました。

注）：この調査は通常操業用の3寸8分目のかごによる調査であるため、密度調査と異なり、採集される雄ガニのほとんどは甲長7cm以上の個体となっています。

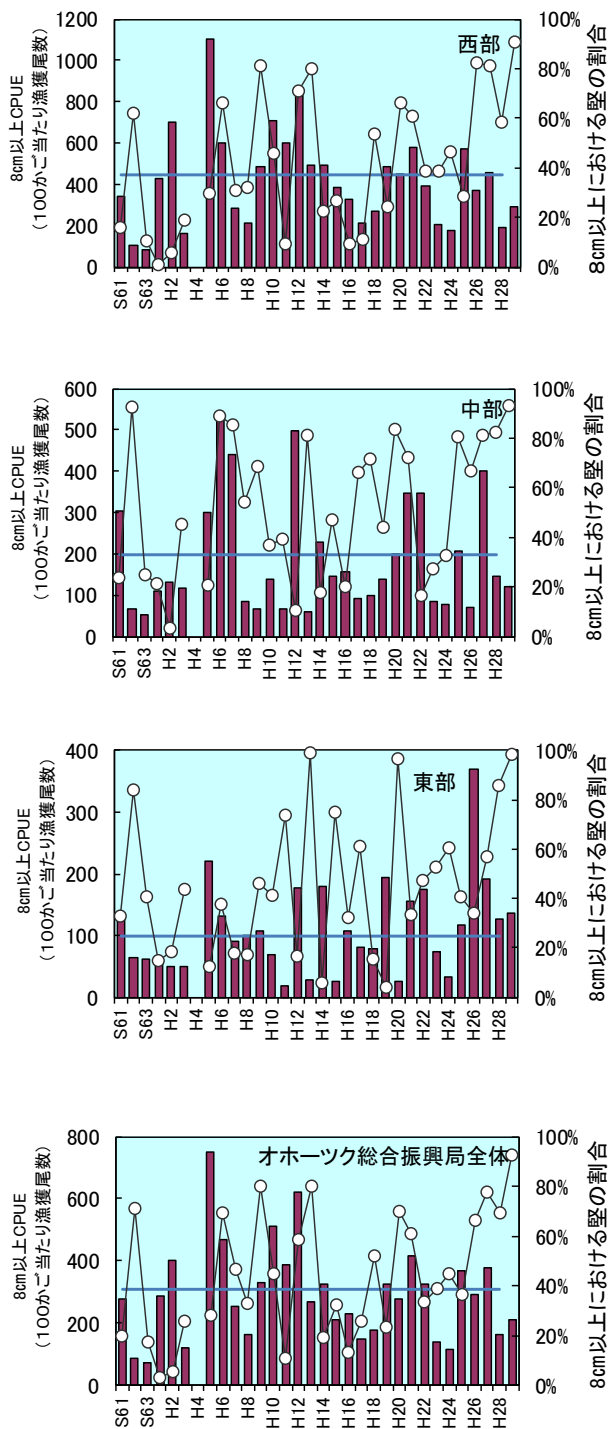


図1 甲長8cm以上雄の100かご当たり漁獲個体数（CPUE；縦棒）と堅ガニの割合（白丸折れ線）の推移（青線はCPUE平年値）

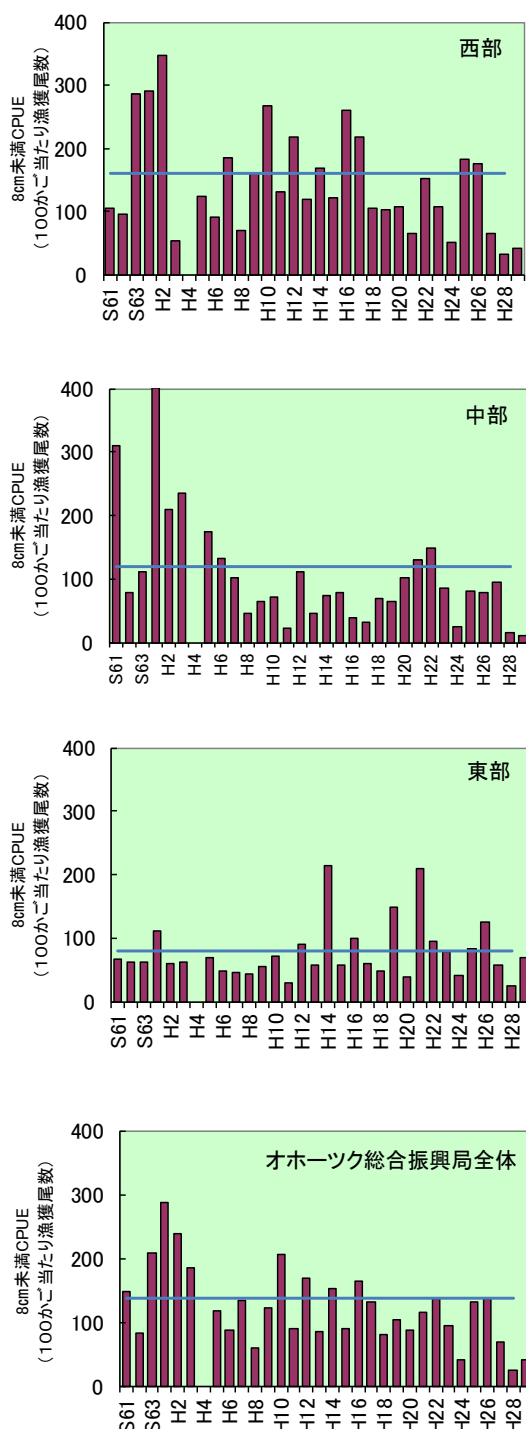


図2 甲長8cm未満雄（規格外）の100かご当たり漁獲個体数の推移（青線は平均年値）

①甲長8cm以上の雄ガニのCPUE：

管内の平均CPUE（1隻100かご当たりの漁獲個体数）は210個体で、平成27年度（163個体）の1.3倍に増加しました（図1）。また、平年値（昭和61年から平成20年までの平均値310個体）と比較すると、平成29年度の値は平年値の0.7倍でした。

海域別にみると、西部海域は292個体で昨年度（189個体）の1.5倍、中部海域は120個体で昨年度（145個体）の0.8倍、東部海域は137個体で昨年度（128個体）の1.1倍でした。平年値と比較すると、西部海域（平年値46個体）は0.7倍、中部海域（同196個体）は0.6倍、東部海域（同99個体）は1.4倍でした。

②甲長8cm未満雄ガニ（大部分が7cm台）のCPUE：

管内の平均CPUEは41個体で、昨年度（25個体）の1.6倍でした（図2）。また、平年値（137個体）と比較すると平年値の0.3倍と大幅に減少しています。

海域別にみると、西部海域は42個体で昨年度（31個体）の1.4倍、中部海域は10個体で昨年度（16個体）の0.6倍、東部海域は69個体で昨年度（24個体）の2.9倍と、西部海域と東部海域でやや増加しました。平年値と比較すると、西部海域（平年値160個体）は0.3倍、中部海域（同119個体）は0.1倍、東部海域（同79個体）は0.9倍でした。近年、小型個体の減少傾向が続いており、今後の加入動向が非常に懸念されますが、この調査は通常操業用の3寸8分目のかごによる調査であるため、密度調査と異なり、採集される雄ガニのほとんどは甲長7cm以上の個体となっているため、今後の加入動向については6月の密度調査によって精査される予定です。

・甲長8cm以上雄の堅ガニの割合と漁獲動向

採集された甲長8cm以上雄ガニのうち、堅ガニの割合は管内平均では92%で、昨年度の69%より23ポイント増加しました（図1）。これは1986年（昭和61年）以降の最高値でした。海域別に見ると、西部海域は91%で昨年度の59%より32ポイント増加、中部海域は93%で昨年度の83%より10ポイント増加、東部海域は99%で昨年度の86%より13ポイント増加しました。

甲長8cm以上の堅ガニのCPUEは管内平均1隻当たり194個体（表1）で、昨年度（113個体）の1.7倍でした。海域別には、西部海域が265個体と昨年度（111個体）の2.4倍、中部海域が112個体と昨年度（120個体）の0.9倍、東部海域が135個体で昨年度（110個体）の1.2倍でした。

・各銘柄（サイズ）の漁獲割合

全漁獲物の雄ガニのうち、銘柄「小」（甲長8cm台）の割合は、管内全域としては昨年度（45%）より10ポイント低い35%、「中」は昨年度（36%）より9ポイント低い27%、「大」は昨年度（6%）より17ポイント高い23%でした（図3）。また、規格外雄の総数に占める割合は、管内全域としては昨年度（6%）より2ポイント高い14%でした。

甲長8cm以上雄ガニのうち、海域別に見た銘柄「小」が占める割合は、西部海域が昨年度（46%）より6ポイント減少して40%、中部海域が昨年度（57%）より11ポイント減少して46%、東部海域が昨年度（64%）より11ポイント増加して75%となりました（図4）。

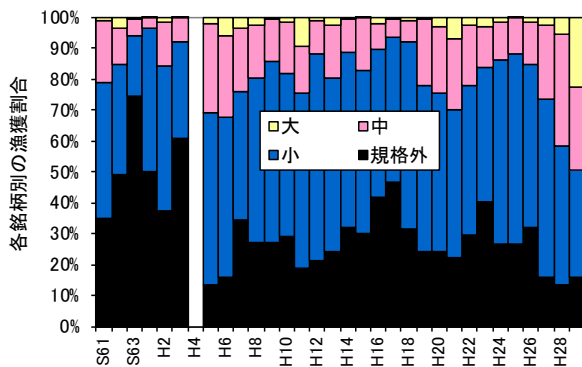


図3 オホーツク総合振興局管内全体における銘柄別漁獲割合（%）の推移

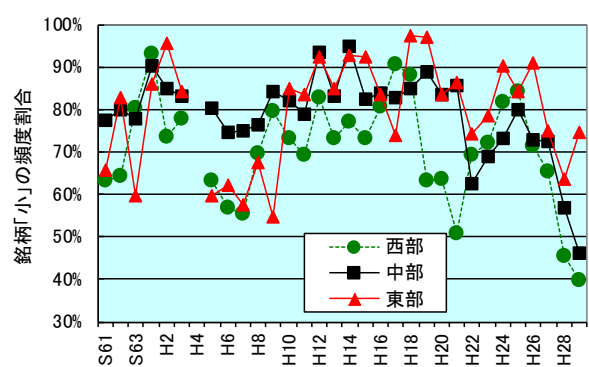


図4 甲長8cm以上（規格内）の総数において小（8cm台）が占める割合の推移